ノーサイドの精神に学ぶ人間力
～真のラガーマン・真のスポーツマンを目指して～

溝畑　寛治

キーワード：ノーサイド，精神，スポーツマン，人間力

はじめに

2011年に、ラグビーワールドカップを日本へと招致活動に勢力を注いでいる最中に、まさかの日本代表選手による暴行傷害事件が続発した（大半は、外国人選手であったが、なかには有名選手ゆえに誘発された事件もあったようである。それにしても、そんな事に応じない態度が必要だ）。何故このようなことが起きるのかと、我々協会を運営するラグビー関係者にとっては大変ショックな出来事であった。そのことが理由となったわけではないが、森会長をはじめとする招致委員会の努力もむなしく2011年の招致活動は失敗に終わり、ニュージーランドでの開催となった。残念なことであるが、気持ちを切り変え、日本ラグビー協会は2015年に、はじめてのアジア地区での開催にむけて新たな招致活動のスタートを切った。ラグビーがアマチュアからプロ化に移行される中で日本ラグビー界でも多くの外国人選手が活動することになったわけであるが、これらの外国人選手に対する取り扱いや指導がしっかりと行われていなかったことなど問題点が多々あったことを反省しなければならない。しかし、なんと言っても選手自身がラグビープレーヤーとして、「ラグビー精神」をしっかり捉えていないことが大きく影響しているものであり、日本ラグビー界、いや世界のラグビー界が反省しなければならない問題点であろう。

スポーツをする人は真面目だとか、スポーツマンに悪い人はいないとか、スポーツは人間性を高めてくれるとか、スポーツによる効明をよく耳にすることがあるが果たしてそうだろうか？スポーツが人間形成の一翼を担ってくれる部分が多分にあることは認められるが、スポーツをしてさえいれば自然に良い人格が身につくというものではない。スポーツの持つ特質を正しく認識させ、指導者が良い方向に導いてやることが不可欠である。今まさに「ラグビー精神」の再認識を呼びかけなければ今後のラグビーの普及・発展はないと思いたち本題を手がけることにした。また、もう一つのきっかけは近年巷を騒がせている不可解な人間関係のコミニュケーション不足等による殺傷事件が相次いで起きていることである。特に子供の問題は、大人が猛反省をしなければならない事であり、襟をたださなければならない。なぜこのような問題が起きるのか、それは何よりも子供たちが家庭に於ける躾（しつけ）を受ける機会が少なくなった事や、テレビゲームやビデオ、パソコン、携帯電話などのIT産業の普及により子供の生活、いや大人を含めた我々の生活スタイルが急激に変化してしまった事などにある。いまや子供たちを心身の歪みから救うにはスポー

ツしかない。スポーツ文化により人間形成教育を図らなければならない。子供達にスポーツを通してコミュニケーション能力や人の痛みを思いやる気持ち感性、思考能力、などの「生きる力」としての人間性を高めてもらいたいし、ラグビーと言うスポーツから学ぶことの出来る人間力（生きる力）を養ってもらいたいと言う願いがあるからである。特にラグビーは最も多人数で行うスポーツであることから人間関係を構築するさまざまな要素と特徴をもっている。

本題名としている「ノーサイド」と言う言葉もラグビー独自のものである。試合の始まりをキック・オフと言い、終了をノーサイドと言う。数ある競技スポーツの中で終了をノーサイドと言うスポーツはラグビーだけである。サイドとは、それぞれの地域を意味すると同時に敵味方のチームを意味するもので、良いチームのことをグットサイドと表現して敬意を表したりもする。試合が終了すると敵味方がなくなって一つになり、同じラグビーを志す良き仲間（good fellow）であると言う意味を持っている。このように試合では闘志を燃やし全力をつくして戦うが、試合が終了すると「良き仲間」として社会の中で共に生きて行く、この精神がラグビーのもつ素晴しい「ノーサイドの精神」である。試合後は、お互いの健闘を称えてファンクションを行い、友好を深め合う。ここでもコミュニケーション能力などさまざまな人間関係を養う要素が多分に含まれている。しかし、このような素晴らしいノーサイドの精神が、何を意味しているのか知らないでラグビーを行っているプレーヤーも多いことは否めない事実である。このような状況が不祥事を引き起こしている一つの要因でもあると思われる。

ラグビーは、競技スポーツの中でも特に多くのプレーヤーによって行われるものでチームワークが大変に重要であり、またポジションによってそれぞれがやらなければならない役割がある。そのために働く内容も違ってくるし、様々な個性を活かせるということがラグビーの魅力のひとつでもある。各々がしっかり役割を果たすことでチームワークが成り立ち、勝利に結びつくことが出来る。そこに信頼関係が生まれてくるもので、“One for all, All for one”「一人はみんなのために、みんなはひとりのために」これがいわゆるラグビー精神である。このような素晴らしいラグビーと言うスポーツから人間力を身に付けてもらいたいし、ラグビーにかぎらずあらゆるスポーツを極める為には、それなりに努力をしなければならない。特に競技スポーツでは、試合の中や練習方法などから学び取ることのできる知識や知恵が山ほどあり、それらから人生に生かす事ができる総合的な人間力（生きる力）を養ってもらいたいと願っている。

ラグビーの誕生とラグビー精神から学ぶ

ラグビーは、ボールゲームの中でも数少ない身体接触がゆるされているスポーツである。その為に生じるプレー事象は千変万化であり、突発的におきることの多いプレー事象に対応する身体技法を身につけなければならない。また身体接触の許されるスポーツでは怪我が付き物であり、危険を伴うものである。その為にルール（競技規則）を守ると言う事だけではなくフェアプレーの精神とラグビースピリットにのっとったゲーム展開がなされるよう指導する事が必要となる。このようなラグビーと言うスポーツがなぜ熱狂的に行われ社会の認知を得、発展してきたのか、ラグビーの誕生から歴史的に振り返りつつ「ラグビー精神」について考えてみたい。

＜ラグビーの誕生＞

楕円のボールを使うスポーツの代表と言えばラグビーであり、ラグビー発祥国と言えば英国であるが、原案となったフットボールの

歴史を辿って見ると、近代スポーツが古代ギリシアのローマに求められたように、フットボールもギリシアで行われていたハルパストン（harpaston）と呼ばれるボールゲームがローマ人によってハルパストウム（harpastum）と言う名で各地に広められたもので、このボールゲームがノルマン人の英国征服（11世紀）以降に英国に伝えられ、フットボールとして熱狂的に行われた。この時代に行われたフットボールは、ハーリング・アット・ゴール（hurling at goal）と、ハーリング・オーバー・カントリー（hurling over country）という2種類のもので、ハーリング・アット・ゴールは、2本の柱を約10フィートの間隔で地上に立てそれと相対する20～40歩離れたところに同じように柱を立ててゴールとする方法で約15～30名の両チームのプレーヤーが裸になり、中央に投げ入れられたボールを争奪し、相手ゴールへ早く運んだ側を勝利とするもので相手の腰から下を捕らえたり、球より前方でプレーすることを禁止したラグビーの原型的なものである。ハーリング・オーバー・カントリーは、ゴールを3～4マイル離れた境界にある樹木や建物とし、数十人の若者がボールを奪い合い、丘を越え谷間を渡って相手ゴールにボールを運んだ方が勝者となる勇壮なゲームであった[1]。

12世紀から16世紀にかけて、若者の間で爆発的な人気となり熱中のあまりに義務づけられていた武術の訓練を怠ったり、また負傷者が続出するなどの理由で禁止令が出され一時期衰退していた。しかしフットボールの魅力に取り付かれた人達によって各地で形を変えて引き継がれるようになった。英国の各パブリック・スクールでは、将来の英国を背負って立つ若者の教育にこのスポーツを採り入れ、各校がそれぞれに改良を加えて独自のルールを作り継続させていった。1823年11月、イングランド中部のパブリック・スクール、ラグビー校で行われていたフットボールの試合中に、ウイリアム・ウエッブ・エリス選手が敵のキックしたボールをキャッチし、ボールを小脇に抱えて走り出し、相手ゴールへ駆け込んだ。この「ボールを持つ」反則から生まれたと言われている「神話」が常識化しているが、当時のフットボールは、ラグビー的な「ハンドリング」と、サッカー的な「ドリブル」を混ぜ合わせたようなもので、手を使おうが足で蹴ろうが、ボールを奪い合った密集戦が多く、それぞれの地域でルールはバラバラに作られ、100校近くあったパブリック・スクールで手の使用を禁止していた学校はごく一部であったと言われている。サッカーの誕生は「エリス神話」の40年後、1863年である。ラグビー派が「ラグビー連合」を発足させたのは1871年、ラグビー校の関係者は、「ラグビー発祥の地」を自負し、各地でラグビー競技の普及に努め，同校にエリス少年の功績を讃える記念碑を作った。

「この碑は、1823年当時のフットボールのルールを見事に無視し、初めてボールを腕に抱えて走った事により、ラグビーゲームの型を創り出したウイリアム・ウエッブ・エリスの功績を記念するものである」と発祥の起源が明記されている。1987年に始まったラグビーワールドカップのトロフィーは「エリス杯」と呼ばれ、エリス少年が残した自由奔放なプレーと荒々しさや勇気がラグビー精神の象徴とされている[2]」。

＜ラグビー精神＞

ラグビーが、「野蛮人のするスポーツ」といわれた時代から、世界の「紳士のスポーツ」といわれるまでに至る過程の中で、パブリック・スクールの教育に取り入れられ英国社会の中で青少年の育成に大きな影響を与えてきたことは紛れもない事実である。英国のパブリック・スクールは全寮制であり、校長をはじめとする学校側の権威を生徒に認めさせる代償として寮での生活を中心に生徒の自治を

認めると言う慣行が生まれたが、生徒の自治を上級生、特に級長（プリフェクト：監督生、風紀係、生徒長、などとも言う）の手に委ねた結果、下級生が上級生の雑用係（ファグ）をする仕事が与えられる様になった。これが「プリフェクトファギング」と呼ばれるようになった制度である。寮での生活は完全に生徒の自治とされ、校長をはじめとする大人の干渉を全く受けなかったため、上級生の下級生に対する支配や強い者の弱い者に対する支配が生まれたのも当然で、極端な場合には、これが残虐行為にまで逸脱したこともあったようである。しかし、大多数は比較的健全な形で定着し、パブリック・スクール独特の質実剛健、苦難をものともしない男性的な気風の養成に大きく貢献をしたのみならず英国諸大学の校風や、かつて世界的に隆盛を誇った英国の指導者層の育成にも大きな影響を及ぼした。また英国が広大な海洋帝国を領有して、大英帝国を築いていった影には、軍事力のみによって統合しただけでなく、ラグビーをはじめとする各種のスポーツが果たした役割が大きいと言われている[3)]。チームワークの観念を大切にし、浸透させたり、キャプテンの権威（キャプテンシー）に従う事や、忠誠を尽くすこと、ルールを尊重させること、またスポーツマンシップ、フェアプレーの精神などスポーツがそれぞれの社会に与えた影響は大である。

イングランドに本拠地を置くIRB（インターナショナルラグビーボード）では、前述のごとく生まれたラグビーをよりよい未来のラグビー普及・発展を目指し、あらゆる角度からの研究が重ねられ指導書等が作成されている。Better rugby（ベターラグビー）や子供たちの為のMini rugby（ミニラグビー）がまさにそれで、Mini rugbyは考案の理由を、1. 教育的な機構の変化に対応、2. 通常ラグビーゲームをする機会の少ない低年齢層の少年たちに機会を与える4)、という事でスキルやテクニックを相手と競い合う状況の下で実行できる構造にしてあり、競争の要素を十分に取り入れている。また近年では、Tag Rugby（タグ・ラグビー）と言われるコンタクトプレーのないラグビーゲームも低年齢層の人たちのために作られている。ラグビーは、最も多人数で行われるチーム競技であり、プレーヤーはスポーツマンシップに則り正々堂々と戦い、一人のスタープレーヤーのためのものでなく、それぞれの役割分担の中で協力し、ルールを守って決して不正をしないというフェアプレーに徹して行われる。本来ラグビーは、ゲームの中でみだりに歯を見せないストイックなスポーツであるとも言われている。（最近は少し変わってきたが）なぜだろうか？その理由は“One for all, All for one”と言うラグビー精神がラガーマンに浸透されているからである。ゲームでは、激しくぶつかり合い、ゲーム終了後はお互いにシャワーをあび友情を温めるというラグビー最大の長所がある。その為、世界中どこにいってもラガーマンであるというだけで友情が芽生えると言う固い絆があり、これらは誰もがうらやむ美風でもある。プロ化に伴ってプレーヤーがゲーム終了後のミーティングであまりビールを飲まなくなり、そのために試合中のストレスを解消することがなくなってしまい他の場所等でストレス発散のケンカが生じるようになったのではなどと勝手な解釈をしている人達がいるそうであるが、そうであるならばラグビー最大の長所がプロ化によって変化したと言うことで、失ったものは、あまりにも大きすぎると言わざるをえない。ラグビー精神を今一度見直してほしいものである。

スポーツと教育から学ぶ

第85回全国高校ラグビーフットボール大会に見事4回目の優勝を成し遂げた高崎監督率いる伏見工高の優勝祝賀会に招待を受けたので出席させていただいた。この祝賀会は、総

監督である山口良治先生の第8回内藤寿七郎国際育児賞希望大賞と平成17年度京都新聞教育社会賞受賞記念を兼ねて行われた。

全国優勝V4は、「信は力なり」を合言葉に繰り広げられた感動のドラマでもありました。また、山口先生の2つの受賞は、スポーツ界での活躍と言うよりも教育者としての功績によるものであり、受賞の喜びを、子供たちと共に歩み続けてきたことで、このような素晴らしい賞をいただき深く感激していますと、常に子供たちの成長を期しての先生の心意気があってのことである。スポーツ界で名を馳せた第一人者であるプロ野球読売巨人軍の長嶋選手でさえも映画化されなかったわけだが山口先生の実話にもとづくスクールウォーズの映画化は、やはり指導（コーチング）の基盤が教育によるものであったからであろう。荒廃する高等学校をラグビーと言うスポーツを通して、立派に立て直した事が評価されての事であるが、部員に真のスポーツのあり方を認識させるまでには大変な苦労があったと思われる。ラグビーだけでなく、日常生活に対する姿勢から一つ一つをていねいに指導し、スポーツの楽しさと、人間としての生きざまを育てていったことにより部員も、また他の生徒たちも自分の学校に誇りを持ち立派に成長して世の中に出て行った。このような素晴らしい教育者がいる事は大変うれしい事である。前述したように、とかくスポーツをしている人は真面目だとか、悪い人はいないとか、またスポーツは人間性を高めてくれるとか言われているが、はたして本当にそうだろうか？

近年の学生スポーツは、ややもすると強いと言うことだけ、勝つことだけに重点が置かれ、世間に名を馳せれば良いと言う極めて理不尽な錯覚に陥っている指導者や選手が多くなってしまっている。スポーツが人間形成の一翼を担ってくれる部分が多分にある事は認められているが、スポーツをしてさえいれば自然に良い人格が身につくというものではない。指導者が教育的配慮のもとで、真の学生スポーツのあり方を正しく認識させ人間性を高めるように導いてやることが不可欠である。特に低年齢層の子供たちにはそのことをしっかり認識させる事が重要となる。ラグビーと言うスポーツを通して、悪童連を立派に成長させる事に力を注いできた例として、特に注目することが出来るのは、大阪の中学校において指導を行ってきた先生方の努力である。方向性の誤りやすい多感な年頃の中学生にスポーツを通して、成長させようと、必死に取り組む姿には感動させられた。従来から行われてきた15人制ラグビーが、中学生では、12人制にすべきであるというIRBや日本協会の方向性に、一人でも多くの選手を試合に出場させてやりたい、そのことで自覚を持ち、成長していくと、教育的配慮を重視して猛反対をした。結局ジュニア期における選手の成長などを考慮して12人制に移行することとなったが、先生方の生徒を思う気持ちがこのあたりにも現れている。大阪を中心に近畿地区の高校ラグビーが強豪揃いである理由は、この点にもある。

人間には、持って生まれた資質や性格などの本性がある。しかし育ってくる環境や経験などによってその人格や能力に違いができて来る。生まれた後に少しずつ段々と社会の中で身についてくる生きる力としての知識や知恵は家庭教育や学校教育によるものであるが、最近はこの部分が弱くなっている。ここに教育の再認識とスポーツによる人間力の育成が必要となる。大人たちは、子供たちによい環境を作ってやり、様々な角度から勉強をしたり、多くの経験や体験を積ませてやったりして、人間としての幅を拡げ実力をつけてやることが必要である。特に最近は社会の変化に伴い子供たちを取り巻く環境も大きく変化し、心を痛めるような問題が多発している。2004年6月に起きた長崎県佐世保市の小学校で6年生の女児が同級生の女児をカッターナイフで

切りつけ死亡させた事件。信じられない悲惨な事件であり、命の大切さを再教育する必要性が痛切に感じられる大事件であった。2001年6月に起きた大阪教育大学付属小学校に出刃包丁を持った男が乱入し、児童、教師を殺傷した事件（これも大変悲惨な出来事であった）から、わずか3年後におきた反省を見る間もない事件である。また、2006年6月に女子大生をめぐる三角関係のトラブルから大学生らによる集団暴力事件が発生し、しかもショベルカーで穴を掘り二人を生き埋めにして殺害するというこれもまた大変に悲惨な事件であり、ただ驚くばかりで唖然とさせられた。このようなリンチ殺人事件について作家の高村　薫氏は、新聞で次のようにコメントしている。

「加害者の中に大学生がいることに驚かされた。大学で何を学んでいたのか。社会に目を向けて生きているようにはとても思えない。最近、社会性や自制心を失った若者が多く、感情をそのまま行動に移す短絡的な事件が目立つ。しかも凶悪化してきた。自己が確立されず幼児性を残して成長してしまったのだろう。こうした風潮は、携帯電話やインターネットが普及し始めた1995年ごろに生まれたと思う。人間としてやってはいけないこと、やらなければならないことが、共通認識として社会を縛ってきたが、その重しがなくなったからだ。事件はサークル仲間と女性を巡る三角関係のトラブルが発端だが、同じサークルなら、会話などから相手との距離感が分かるはずで、なぜ殺人にまで暴走するのか想像出来ない。今の状況が文明社会の行き着いたところなのかも知れないが、放置しておくと、どんどん悪化していく。事件を起こしたような若者が40歳、50歳になった時、夜は一人で歩けないほど治安が不安定な地域も出てくるだろう。現状を変えるための確かな処方せんはない。こういうことをしたら相手が怒る、悲しむ、喜ぶ。それが分かる感受性や想像力を培う生身の人間のコミュニケーションを築けるように、親、社会、学校が一体となって、これから生まれてくる子供たちにきちんと教え込む努力をするしかないだろう[5]。」（読売新聞、2006年6月28日朝刊）

佐々木光郎氏は、このような犯罪を起こす人の多くは、幼児期に自然体験が少なく、学童期にいわゆるギャングエイジの体験がないと言う。そして子供時代に自分達が失っていた経験できなかった事を追体験していると言う[6]。かつての日本社会に於ける家族（家庭生活）の中では、自然に行われていた人の気持ちを思う為の訓練が今では行われなくなってしまっている。都市への人口集中により、住居は高層化され扉ひとつでくぎられ、隣近所のつきあいが少なく地域住民とのコミュニティーが薄れ、また家族も少子化によって向かい合う親兄弟（姉妹）との会話やふれあいも少ない。昔のように親戚一同の集まりでの会話の中や近所の人々との付き合い、兄弟げんかなどで、家族間の気持ちの駆け引きや自覚、そんな他者との付き合いの中でコミュニケーションの方法を学ぶ機会が多くあった。周りの人への思いやりや気くばり、しかもそれは知識からだけのものではなく感情からくる親切さでもあった。ケンカは協調性を育てるとも言われている。殴ったり、蹴飛ばしたりしながら、そんな中で相手との間合いを学んでいく。ケンカしながらそれなりに加減することを覚えるようになる。相手に対して加減するようになるのは他者に対して共感する能力があるからである。痛みや苦痛などの自分に対する身の危険を感じることで他者を自己と同一視し共感することを学ぶわけで、最近多くなった低年齢層の子供たちによる残虐な傷害事件は、まさにケンカがなくなったことによるものと関連があるように思われる。自分自身が傷つけられた経験のない子供が他者を平気で傷つけてしまうケースが多い。ラグビーは、ある意味ルールのあるケンカであ

る。競い合う中でお互いの「いたみ」がわかる。だから試合が終了すると同じスポーツを愛好する仲間になれるのである（良い仲間＝Good fellow)。

今、アメリカでも、EQ関係の本がベストセラーとなっている。IQはもちろん知能指数のことであるが、これに対してEQとは、「こころの知能指数」（Emotional Intelligence Quotient）のことである。つまり、ものごとにどれだけ豊かな感受性をもっているかであり、

- 人の痛みがどれだけわかるか。
- それに対して、自分はどう対応できるか。
- 対応するために、自分をどこまで変えられるか[7]。

などであり、これを指数で探り、指数の高い人をEQの高い人と言う。まさに日本人が今まで大切にしてきた「こころ」の問題なのである。アメリカのダニエル・ゴールマンが1995年に「Emotional Intelligence」と言う本を書いて以来広まったものである。最近では企業も、EQの高い人を求めていると言う。身体運動やスポーツ活動は、運動不足病による多くの疾患の予防と言うことだけにとどまらず人間の心理的な面での疾患予防や治療効果に大きく期待されるものであり、薬物治療による副作用がないことや、低コストによる効果からも大変重要視されている。

文部科学省も「詰め込み教育」の反省から「ゆとり教育」の旗印のもと、「知識」を伝達する教育から「知恵」を生み出す教育へと変換を図ろうとしている。物事を「言葉や知識として知る」ことと「身体で感じ、わかる」ことの違い、あるいはその重要性については、さまざまに説明されてきたが、マイケル・ポランニーは著書「暗黙知の次元」で「我々は語れる以上のことをしっている」と表現して、言葉では表現しにくいが、自分では知っている「暗黙知」の重要性を指摘している。この「暗黙知」とは、文章や言葉、数学的表現などのように情報として容易に入手することのできる知（いわゆる形式知）に比較すると、人間一人ひとりの体験に根ざす個人的な知識であり、言葉や文字などに形式化したり、他人に伝えたりすることが難しいとされている[8]。レイチェル・カーソンは著書「センス・オブ・ワンダー」において「子供時代はさまざまな情緒や豊かな感受性を耕すとき、知ることは感じることの半分も重要ではない」と表現して、子供時代に身体を通して「感じ取る」事、すなわち子供時代に暗黙知を構築することの重要性を指摘している[9]。「暗黙知」はいかにして育まれるのであろうか、それは一人ひとりの「体験」を通してでしかない。特に遊びやスポーツにおける試合や練習などの体験は多くの「暗黙知」を構築する場としてふさわしいものである。

長崎市で2003年7月におきた少年による男児誘拐殺人事件などを受け、地域住民と子供たちが一緒に遊びやスポーツを楽しむ「地域こども教室」が推進されている。文科省、教員OBによる学習指導などにより、これらの事業を拡大する予定で運用費用を支援すると言う。このような試みが多くの地域で実施されていくことを期待したい。

ラグビーは、前述のごとくイギリス発祥のスポーツである。イギリスのスポーツが市民に認知され、19世紀の後半から世界中に普及したのは、パブリック・スクールで教育の一環としいて取り入れられたことによるものである。パブリック・スクールでスポーツを最初に取り入れたのは、ラグビー校のトマス・アーノルド（Arnold, T. 1795～1842）であった。学生の教育に対する活性化を計るため週3回（半日）をスポーツ活動に充て、学生の自主的な活動を通して、団結心やルールを守ること、強い意志と強健な身体の育成が図られた。ラグビー校のスポーツによる人間教育がイギリス全土のパブリック・スクールにも広がり、ジェントルマンの育成につながった

のである。近代オリンピックの創始者であるクーベルタンもこのラグビー校のアーノルドの教育に影響を受けて当地を訪れ勉強したと言われている。当時のパブリック・スクールの校長達が如何なる人物であり、教員や学生の間で信望を博していたかを語る逸話は余りにも多く聞かれるが、中でも特にリース校でのこの話はあまりにも有名なことであるので記しておきたい。「もし、この世に神に近い人間があるものとすれば、それは我々の校長ではないか」と言った学生がある。14〜15歳の少年にこの言葉をいわしめたその人格が偲ばれる[10]。実に素晴らしい教育者である。こんな先生が多くを占めたなら「いじめ問題」なども減少するのではないだろうか？

上述したような教育的背景を持つスポーツが、明治期に日本にたくさん導入され学校教育の場で広まっていった。そしてほとんどのアマチュアスポーツは、学校現場でいわゆる部活動として発展してきた。そこでは、教員がほとんど無償で指導にあたるという時間と労力が使われてきた。スポーツを通して人間性を養う情熱にあふれた教員が大勢いたことが日本のスポーツを支えてきた大きな利点であった。しかし、今、日本のスポーツ界は大きく変わろうとしている。オリンピックやワールドカップにみられるようなトップアスリートを目指す競技スポーツはプロ化の傾向にあり、本来のスポーツは楽しむものと言う考えからは、ニュースポーツなどを取り入れた「生涯スポーツ」に向けてライフスタイルを考えた方向性が出てきた。かつて隆盛を極めた企業スポーツもバブル期以降各競技で休廃部が続出した。企業スポーツはそれぞれの企業でそれなりに士気を高めてきたがバブル崩壊後には経営上の問題からスポーツ活動は撤退するしかなかった。そして企業スポーツに代わる形態として地域クラブに移行する方向性が見出されてきた。まさに今が過渡期である。このような社会の状況によってスポーツ界の構造も変える必要があるが、「地域型クラブ」への移行が、日本の学校中心に発達してきたスポーツと切り離していけるのか心配な部分が多々ある。特に指導者の問題が大きい。スポーツを通して人間教育を担う情熱にあふれた指導者が多く存在してくれるのだろうか、いや、存在してくれることを願うばかりである。

スポーツマンシップとフェアプレーの精神から学ぶ

我々は、普段何気なく、あの人はスポーツマンだからとか！スポーツマンっていいねとかを耳にする。日常生活の中でなじみの深い言葉として使われているが、ある意味において非常に不明確なことばである。広辞苑によると、スポーツマンとは運動家、運動競技の選手とあり、スポーツマンシップとは正々堂々と公明に勝負を争う運動家精神、すなわちスポーツマンにふさわしい態度とある。19世紀の後半にイギリスにおいてアスレティシズムが勃興する中でアマチュアリズム、フェアプレー、チームスピリット、騎士道精神などと結びついて一種の倫理規範としての意味を持つようになった。また、オックスフォード英和辞典では「Sportsman＝Good Fellow（＝良い仲間）」と記されている。これはまさにラグビーに於ける試合の終了を告げるノーサイド＝敵・味方がなくなることを意味しており、同じスポーツを愛好する良き仲間をさす言葉としてふさわしいものである。

スポーツマンがお互いを良き仲間として尊重することからスポーツマンシップという言葉が生まれたのではないかと言われている。すなわちスポーツ競技を行う上で守らなければならないルールや、試合の相手、審判などを含めて尊重することであり、スポーツの精神的な価値を認めるものである。特にラグビーの試合では、1チーム15人と言う多人数がお互いに闘志を燃やしてぶつかり合い、入り乱

れて戦い合う、見ている人たちにとっては、よくケンカが起きないと感心させられる場面が多発する。しかし、試合中に守るべき態度や規律が身についている。フェアにプレーすること、審判に従順であること、ルールをしっかり守ることなどスポーツマンとしての人格をそなえ持っている。だから乱闘になることなど少ない。フェアプレーとは、このように試合中に守るべきルールや態度であり、もともと中世ヨーロッパの騎士道から来た言葉で1対1の正々堂々とした戦いを意味しており、「相手の不利につけこまない」と言うことであった。

ルールは、お互いが気持ちをわかり合う合意のもとに気持ちよく試合を進行させるために存在するものである。しかし、ルールを無視した行為であるが「スポーツマンシップと友情の美談」として長く受け継がれている話もあり、ここに紹介しておきたい。

昭和時代のラグビーを語るとき、昭和5年という年は、日本のチームが初の海外遠征を実現するなどあらゆる意味で近代日本ラグビーのスタートの年であると言える。この年、カナダに遠征を行った日本代表チームは、香山蕃監督以下25人（早、慶、明、立、法、東、京、7大学、OB6人）によって構成され、12日間をかけて太平洋航路をハワイ丸で出発し6勝1敗という好成績で帰国した。テストマッチに匹敵する第6戦では、日本のトライゲッター鳥羽選手が負傷退場したとき、カナダのティレット監督が日本の香山監督に「すぐに交替選手をだせ」と申し入れた。（当時のラグビールールでは交替ができないことになっていた。）ルール上の問題があることから香山監督がためらっていると、カナダ側も選手を一人減らしてしまった。まさに相手の不利につけ込まないというフェアプレーの精神である。止むを得ず日本側も補欠選手を出場させ、15人ずつの対等で戦ったのである。この「スポーツマンシップと友情の美談」は、中学校の国語教科書にも取り上げられてすっかり有名になってしまった。この遠征は、日本のラガーマンの自信を高め国内のラグビー普及に大きな影響を及ぼした[11]。（ラグビーマガジン別冊　薫風号　第10巻第1号、1989年6月20日発行、ベースボールマガジン社より）

このように、ルールを無視した行為ではあるが、お互いの合意の下に気持ちとして行動を起こした両監督の人間としての素晴らしさに敬意を表したい。

少し話は変わるが、先日ふだんはあまり電車で通勤しない筆者が朝のラッシュ時に電車に乗り満席の前に立った。すると、既に座っていた女子高生が、どうぞ！と言って席を譲ってくれた。筆者自身、席を譲ってもらった経験は初めてであったので戸惑ってしまったが、素直に有難うと言って座らせてもらった。この時の女子高生が、社会規範としてお年寄りに席を譲ると言う行為がルールやマナーだからそうしてくれたのか、それとも筆者が辛そうで、楽をさせてあげようと言う気持ちで譲ってくれたのか？この二面性が考えられるが、ルールやマナーをしっかり身につける社会規範と、人間の感情としての気持ちの持ち方の大切さ、この両面を心の中に持つ事の大切さを指導していく事がいかに大事かを痛感させられた。おそらく筆者に席を譲ってくれた女子高生は、この両面を兼ね添えた素晴らしい人間であると思われる。

スポーツ活動では、ルールやマナーを守ると言うことが習得されるにとどまらず練習方法などから学び取る数々の知恵や、試合に於ける戦術・戦法・作戦と言った中でも、自分と周囲との関係や相手の気持ちをわかろうとする力が働き、自分自身をコントロールする機会が多く存在する事で感情をコントロールする能力が育成される。ラグビーでは、ラグビー精神に則ってゲームが遂行される。その為にルールを守る事は当然であるが重要視されているのはラグビー精神（スピリット）の

方である。このラグビースピリットの基にルールが出来ており、スピリットが守られなければルールが理解出来ない。だから時おり、これを理解していない者どうしがケンカをするという場面に出会う。先日も、ある大学間の練習試合でラック状況になった時、ラックに参加していないR大学のウイングの選手が突然、倒れて寝ているK大学の選手に走りよって蹴りをいれた。当然レフリーは退場を命じたが、何事かと唖然とさせられる行為であり、学生としてラグビー選手としてあるまじき行動である。以前にも、ある大学で倒れて寝ている選手に対してプレーとは全然関係のないところであるのに顔を踏みつけに行った選手がいた。どちらも理解できない行為であり、厳重に注意をしたが大学生になるまでどのような教育を受けて人間性を養ってきたのかと、はなはだ遺憾に思うとともに情けない思いをさせられた。特に学生スポーツでは、ルールやマナーをしっかり守り学生らしいラグビーを行ってもらいたい。大正13年に「アサヒスポーツ」に掲載された「ラグビーフットボールの研究」で「競技者への希望」の項に、京都大学　奥村　竹之助氏が次のように述べている。「第一にラグビーに関係せんとする人は、何よりも正義の士であり一個のジェントルマンであることを必要とする」と超学生的風格をもってラグビーをすることを希望する。と既に言って、この時代東西の強豪大学チームが入り乱れて熱戦を展開していく中でややもすると勝敗にこだわりすぎて粗暴、傲慢、乱暴といった好ましからぬ態度と行為があったことを戒めている。ラグビーのルールブックには、「IRBラグビー憲章」PLAYING CHARTER が最初に掲載されている。憲章では、1. ラグビーの目的　2. ラグビーの原則（ボールの争奪、攻撃／プレーの継続、防御／ボールの再獲得、多様性、報酬と罰）3. 競技規則制定の原則（安全性、平等な参加機会、独自性の維持、プレーの継続、プレーする喜びと観る楽しさ、スペースの確保／報償、失敗と罰則、一貫／遵守／簡潔、ルールブックの普遍性）等が示されている[12]。しかし、これらのルールブックをしっかりと読んでいる選手は少ないのではないかと思わざるをえない。

広瀬氏は、著書「スポーツマンシップを考える」（ベースボールマガジン社　2002年10月14日）の中で、スポーツマンシップとは、一言で言えば「尊重（RESPECT）する」ことであると言い、試合の相手を尊重し、審判を尊重し、試合の規則を尊重すること。このことは自分の行う試合そのものを尊重することになる。重要なのは、公正（フェアプレー）の精神である。これから「正義」「規則に忠実」「審判に従順」「規律を守る」などが導かれる。そして自分が守るものとして「最善を尽くし」「勝って誇らず」「負けて悔いない態度」「明朗」「責任」「謙虚」「勇気」「忍耐」などが挙げられると言い、さらに競技者どうしがお互いを示すべきなのが「同情」「親切」「共同」「友情」「敬愛」などであり、これらが統合されて「良き人格」になると言っている[13]。また、スポーツマンとして大切なことは、勝負に負けた時の態度である。負けた時には素直に負けを認め、それでいて頭を垂れず、相手を称え、意気消沈せずに次ぎに備える人であり、負けた時に潔い人をグッドルーザー（GOOD LOSER）と呼び、フェアプレーやグッドルーザーという概念を包括的に言い表している言葉がスポーツマンシップであると言い「人格的な総合力」であると言っている。

近年、スポーツが社会・経済・政治とかかわり合いを持つようになって来たが、スポーツマンシップやフェアプレーの精神は、いつまでも堅持してもらいたい。勝つことのみが選手に義務づけられすぎてスポーツを愛好する人達の良心までもが破壊されてしまう事は、スポーツの大きなマイナスとなる。サッカー

W杯のジダン選手の行為をどのように思うか？マセラッティ選手の「やじ」をどう思うか？どのような競技のスポーツであれ、選手には自覚と責任が求められる。ジダン選手はフランスサッカー界何万人かの代表であり、サッカー選手の夢であり、憧れである。マセラッティ選手も、イタリアサッカー界の代表であり、少年サッカー選手たちの憧れである。ラグビー日本代表選手は競技人口13万人のラガーマンの憧れである。このことを忘れてはならない。スポーツからスポーツマンシップやフェアプレーが消えていくことは社会から見放されていくことにつながる。プロ化に伴って、勝利至上主義、金儲けのみに終始し、自己中心的な人間となり、挙句の果てに麻薬、アルコール等に脱線していくことのないように社会全体が目を向けて今後も十分に指導していかなければならないし、せめて学生スポーツでは決してそのような事がないように今一度「真の学生スポーツの構築」に力を注いで行きたいと思っている。

チームワークから学ぶ

よくあのチームは「チームワーク」が良いとか、悪いとかを耳にするが、一体何をもってそのように言われるのであろうか？特に団体スポーツで試合に勝つ為には、それぞれの役割分担をしっかり守らなければならないし、その上に立ってなお他の部分で弱点となるところがあればカバーしてやる事が大切である。特に多人数で行うラグビーや、アメリカンフットボール、サッカーなどではそうであるし、卓球やテニス、バドミントンと言った2対2で対戦するゲームでは、パートナーの動きをしっかり把握してお互いが助け合わなければならない。もともとチームと言う意味は、語源的に「荷車やソリなどを共同で引く一連の馬や犬」などの連獣から来た言葉であり、中に皆と違った方向に進むものがあれば進行を遅らせることになるし、また皆が、がんばってくれているので少し位力を抜いてもいいかなどと、手抜きをするものがあると目的地への到達が遅れる。このようにチームなどでは共同で活動する場合、構成員の努力が2＋2＝5となるようなプラスの相乗効果（シナジー効果）を生む場合もあれば、調整がうまくいかず2＋2＝3となるようなマイナスの効果が生まれる場合もある[14]。集団での活動では、他人が一生懸命努力するから自分は少々手抜きをしてもわからないだろうとか、いいのではというような社会的手抜き行為があったり、組織的活動の成果にタダ乗りするような行為があったりする。このような行為をフリーライダー行為と言い、これらは集団や組織で行う共同作業の根本的な問題である。多人数で行うラグビーや、サッカー、アメリカンフットボールなどでは、よくある行為である。自分達のチームにそのような行為がないかどうかよく観察しておくことが大切になる。

○チーム制組織の特徴

1. チームは、人々の協働であるから結合のレベルや密度が極めて高い事であり、根本的に作業そのものの結合と言う側面と、それを担うチーム員の人的社会的結合と言う二面的な結合が重要である。イギリスの有名なチーム研究者ベルビン（Berbin. R. M）は、チームの最適人数は4人で、それ以上になるとチーム効率が急速に低下すると言う。4人は四角形のテーブルに一面ずつ着席できる数であるという[15]。ラグビーは、この約4倍の人数で行われるスポーツであることからおのずと結合性が弱くなる。だから、より結束力が必要でありチームワークが強調される。目的意識をしっかり持たせることと、多くのミーティングが必要である。アメリカのハックマン（Hacman. J. R）も、実証的研究によりチームの人数は4〜5人が最適で

あり、実際に必要とされる人数よりやや少ない方がよいとしている[16]。

2. チームは、何よりもまず作業の結合体であって、チーム員は作業のうえでの結合を基本とする。作業の内容は多種多様であり千差万別である為チームの編成方法も様々なものとなる。しかし、チーム全体としてなすべき作業の内容や到達目標がチーム員に明確になっており、協働によって何らかの効果を前提とするものである[17]。
3. チームは、作業の共同体性の上において人間同士の結合、すなわち人間の結合体、つまりチームとしての連帯性が進むことで他方において作業の結合を促進するものとなる事を特徴とする[18]。
4. チームは、作業関係においても人間関係においても結合のレベルが高いものであるから、チームの運営、すなわち管理（計画・指揮・コントロール）をチーム自体において自律的に行うようにする傾向を持つ事を特徴とする[19]。また、構成員の変動が少ない方が望ましい。このようなチーム組織の特徴をしっかり掴んでいる事が必要である。

○マイナスの協働効果

1. ランジェルマン効果（フランス人ランジェルマンが1880年代に行った実験による）1882年から1887年にかけて男子大学生を実験対象として重い荷物を引く作業を単独でさせた場合と集団でさせた場合の変化を見たものが表1である。集団作業において、各メンバーがその力を同時的にぴったりと調整して発揮するのが難しい理由は、調整ロスが起きる為とランジェルマンは言っている。また調整ロスだけでなく、モチベーションロスもあると言っている。スポーツのチームでも同じことが言えるので十分気をつけなければならない。

表1　ランジェルマン実験の結果

1チームの成員数	1人あたりの作業量	チーム全体の作業量
1	100%	100%
2	93%	186%
3	85%	255%
4	77%	308%
5	70%	350%
6	63%	378%
7	56%	392%
8	49%	392%

（大橋昭一・竹林浩志編著、現代のチーム制、同文館出版2003、p48から引用）[20]

2. オルソン（アメリカ人）の主張
オルソンが指摘せんとしたものは、組織が強大化するとかえって組織目的の為に努力しないものが増加し、組織の力は弱くなるという現象があることである[21]。
・ソーシャルローフィング（社会的手抜き）
・モチベーションロス（組織としてなすべきことについて自分は熱心にやらなくても誰かがやってくれてそれが達成され、しかも報酬など処遇は差別されない事がありうるために起こる[22]。）
これについても十分に認識しておかなければならない。

○モチベーションロスの克服に向けて

モチベーションロスをモチベーションゲインに、つまりプラスの協働効果に転化することが必要である[23]。ということからエレブは、モチベーションロスの克服のためにはチーム相互間で競争させることが有効な方法であると考え次の方法から結果をみている。作業グループによる方法（エレブの実験：1993年、48人の男子高校生を4人ずつ12グループに分け、オレンジの摘み取り作業をさせた。）

① 作業も報酬計算も個人別に行われる方

法。

② 作業も報酬計算も4人全体について一体で行われ、報酬は4人とも平等に与えられる方法。

③ 各グループをさらに2人ずつのサブグループに分け、作業の報酬計算もサブグループごと別々にしてサブグループ同士で競争させ、成績の上位に高額の報酬を与える競争的方法。

以上3つの方法では③競争的方法 ②個人別作業方法 ①全員平等方法の順で集団的競争効果が生まれている[24]。

○プラスの協働効果

ケラーの力能差効果：メンバーの中で能力や努力、意欲に劣るものがある場合、その者の行為はチーム全体につまり劣位者以外にも大きな影響を与える。実験によると優位者と劣位者の個人力能の差がおおよそ1対0.6～0.8の時，劣位者のチーム作業における作業量は、当該劣位者のもともとの個人作業量以上のものとなり、モチベーション向上が見られる。しかし、優位者と劣位者とのもともとの差が大きい場合と小さい場合はモチベーション刺激をうけない。メンバー間で、もともとの力能にあまり大きな違いがないときに劣位者はチーム活動による刺激を受け、もともとの個人的力能以上の成績を発揮する事ができ、チーム協働効果を生じる[25]。これがケラーの力能差効果である。

○社会的促進論

社会的促進とは、他人が傍にいたり、見ていたり、一緒に行動する事によって作業遂行について善かれ悪しかれ影響を受け、刺激を受ける事をいう[26]。（観客効果，共行動効果）それぞれにプラスとマイナスの面がある。

○社会的補償の考え方

団結力の強いチームなどでは、さらに進んで優位者がチームの成績向上のためにより積極的に努力し、チームに対して貢献し、劣位者の足らないところを補い、埋め合わせる事がある。

○社会的アイデンティテイ論

ユニフォームを着用した集団とそうでない集団との競争では、ユニフォーム着用の方が好成績を収めている。単独の作業ではユニフォームなしの方が好成績となっている。他集団との競争では、ユニフォーム着用の方がモチベーションの向上がみとめられる。

ユニフォームに背番号を付けたのは、サッカーよりラグビーの方がはやく、1897年オーストラリアのブリスベンで行われたクィーンズランド対ニュージーランドの試合である。英国ではじめて背番号を付けて試合をしたのは1922年イングランド対ウェールズ戦であり、今と背番号が逆で①がフルバック、⑮⑭⑬がプロップであった。数字の変わりにアルファーベットA～Oを背番号としたチームもある。サッカーは、1933年イングランドのFAカップでエヴァトン対マンチェスターシティーが決勝戦で付けたのが初めてである[27]。最近では、試合前のアップ時でもチームウエアを着用して意気を挙げるチームが多くなった。

○チームの相互協力関係論

プラスの協働効果から、ツジョスヴォルド（Tjosvold. D）らの相互協力的関係を軸にしたプラスの協働効果論をみてみたい。一般的に広く考えると、集団やチームなどで複数人が集団的に活動する場合、その構成員相互の間には大別して3つの関係がありうる。

ひとつは、構成員が相互に協力的な場合。

そして、構成員が相互に競争的な場合。また、構成員が相互に無関係な場合である。れ集作の結合的作業形態、分離的作業形態、加算的作業形態の3形態に照応するものである[28]。しかしながら実際には、1つの集団ないしチームにおいては、ある特定の構成員相互間において3つの関係が少なくとも時と場合により入れ替わって現れたりすることもある。つまりこの関係は相互に排除するものではなく共存しうるものであり、一義的にどのような関係かと決めうるものではない。集団の中でもチームは、そうした中にあっても本来、相互協力的関係が支配的であるか、少なくともそれが優先するものである。そうした力が働くのがチームであり、これがチームの存立条件であり必要条件である。

ツジョスヴォルドらは、1898年から1989年までになされた約675の実験や研究を統合してとらえると、人間同士の積極的な協力関係が促進的相互作用を生み、促進的相互作用がその集団の目的達成の為に構成員各人が努力するような作用をもたらすという結論が得られると言っている。これらを研究結果からまとめて次の3者に集約されるという。

1. その集団内においてある構成員が他の構成員の足らないところを補うこと（社会的補償）。
2. 構成員たちが心理的肉体的エネルギーをとにかく自己以外のものに投下すること、すなわち良い意味でのカタルシスが起きること。
3. 誘引性が高まること。

そして、こうした相互協力関係においても構成員相互にコンフリクト（争い）があることは否定されないことが肝要な点である。と言うよりは、それがかえって協力関係を強め、その集団を強いものにする。これを建設的討論のダイナリズムと呼んでいる[29]。最初は構成員各人が自己の考えを表明し、展開する段階でそれに対して他の構成員が別の考えを述べ、コンフリクトが表面化する。そこでこの別の考えに対して質問をし、それを理解しようとする。そのうえでコンフリクトにある考え方が統合されて、新しい有益な考え方が創りだされる。そして、これに全員が合意して実行を図る。図示すると次のとおりである。

このような状況を作るためにもミーティングをしっかり行うことが大切である。

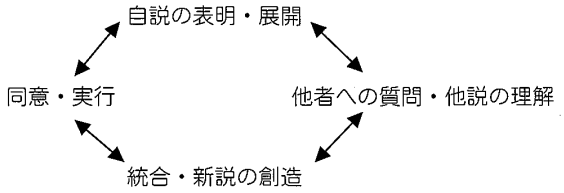

図1　建設的討論のダイナミズム
（大橋昭一・竹林浩志、編著、現代のチーム制、同文館出版、2003、p62から引用）[30]

○チーム効果を生む諸要因

チーム効果を計る為には、モチベーションの向上が大きく影響する。たとえばユニフォーム着用は、チームへの求心性・統合化を強め、それによってやる気を高めてチーム成績の向上につながる[31]。さらにチームにおいては、人的結合が強まることによってコミュニケーションがよくなり、それによってチームメンバーのやる気が高まってチーム効果が向上する。こうしたチーム効果を生む要因は色々と考えられるが一般的には、次の6つにまとめることが出来ると言われている。

1. コミュニケーション向上チームとしては公式組織上でも、非公式組織上でもコミュニケーションがよいことである。
2. 作業（仕事）の調整・・・・・・・・・・チームとして、作業の技術的社会的調整がスムースに行われる傾向があることである。

3. メンバーの力能の平準化……チームでは、メンバー同士で学習機能が起き力能等で平準化傾向が起きることである。
4. メンバー同士の支援……チームでは、メンバー同士で協力傾向が強まり、助け合いの傾向があることである。
5. 行動の規範化……チームメンバーとして期待されるような行動が生じることである。
6. チームの統合化……チームとしての団結心の強化傾向で、チーム精神の高揚化傾向があることである[32)]。

以上のように、チームワークの良し悪しを決める色々な要因やチーム力増強等について述べてきたが、実際にチームワークを育てるためには、チーム構成員が目的意識をしっかり持ち、コミュニケーションを十分にはかり平素から地道なチーム作りをする事が大切である。また試合に臨むにあたっては、さまざまな内面的、精神的ストレスがはたらき、これを克服するためにも平素の訓練・練習（メンタルトレーニングを含む）が必要である。

チームワークを象徴するということで野球を例にとった話を以前に読んだことがある。筆者は誰か記憶にないがチームワークが一番分かりやすいのは、野球であることを例にとり、打者が内野ゴロを打った時、観衆はころがるボールの行方を追う、そして野手からボールが一塁手に送られる。この時、捕手は、野手の投げるボールを一塁手が後逸しないかたしかめ、もしエラーがあった時の為に、一塁の後ろへ駆けつける。そして、なにもなければ本塁に駆け戻ってくる。野手が後逸すれば転々と外野に転がるから保守の援護は不要になる。打者が内野ゴロを打つと毎回カバーに行く行為を誰も見ていないし、気にも留めていないだろう。これほど観衆に認められない縁の下の力持ちはいないだろう。しかし、チームの守備組織がみだれないようにカバーに走る捕手の行為は、野手との信頼関係が出来る大きなポイントであり、まさに、チームワークと言えるのではないかと述べられていた。チームワークは人的結合の強さを示すものであり、スポーツマンシップの最たるものと言える。最近の子供たちは同年齢集団でしか遊ばなくなり、異なる個性の人間と関わることが減少している。したがって、子供たちがいろんなところでチームを体験することは大きな意味を持つことである。チームでは、同年齢の子供たちの交流や、異年齢の子供たちの交流、大人の指導者と子供の交流等がある。このようにスポーツは我々人間に貴重な教訓を与えてくれるし、またスポーツから学び取るところは大である。現、日本ラグビーフットボール協会の名誉会長である日比野弘氏が、「体育科教育」（大修館書店）1982年10月号にスポーツから学んだことについて、「人間の生きざまを学ぶ」と題して次のように書かれている。

スポーツ……私の場合は、ラグビーだが、学んだことは余りにも多すぎてとても一口には言い表せない。強いて言えば、人生の生きざまそのものを教わったとでも言おうか。ラグビーは、組織と組織の格闘技である。チームの誰もがトライを上げるたった一人のヒーローのために、自分を犠牲にしてボールを供給する。だからトライをあげたヒーローも手柄顔をしない。自分が15分の1の責任を全うしただけに過ぎないことを知っているからだ。スクラムから良いボールを供給する為に、頭をぶっけあい、耳がつぶれるまで練習してきた仲間がいる。いや試合に出られる連中はそれでも恵まれている。15人以外の多数の部員は、くる日もくる日も激しい、苦しい練習に堪え忍びながらチームの勝利のために捨て石

になってくれるのだ。ラグビーは、チームスポーツである。一個の楕円球に命をかよわせて攻撃し、防御する。15人のプレーヤーには、すべて果たすべき責務がある、一人のプレーヤーがタックルに恐怖をおぼえ逡巡したとき組織は破れる。ラグビーでは、仲間のために喜んで自己を犠牲にできる心を育ててくれる。恥ずかしいことだが、私は三年前に事業に失敗した。百年も続いた老舗を閉める事になったのである。私自身の経営ミスに加えて、大口取引先の夜逃げから、急速に悪化し、会社を存続させるか否かの重要な決定を強いられる事になった。多くの人々は、仕入先や銀行に迷惑をかけても、会社を残すべきだと勧めてくれた。だがラグビーの教科書には人に迷惑をかけて自分が生き残る事は教えていない。私は父母や親戚に詫びながら、会社の資産と、個人の資産を全部売却し、全債務を弁済する事にした。多くの友人が手を差し伸べてくれた。個人で私に融資してくれた友人が“僅かな金額だけど、返済の心配をしないで役に立ててくれ”といってくれた。こんな友人を裏切る事はできない。それは私の心が死ぬ事になる。この頃、普通の神経なら参ってしまうであろう苦しみの中でバイタリティを失わずに頑張れたのも、ラグビーのお陰だと思っている。銀行の人から、社長よく眠れますね！と皮肉を言われたが、私だとて平気であった訳ではない。眠らなければ明日に差し支えると思って寝る努力をしたに過ぎない。ただ私には友人がいる。心から信じあえる多くの友人がいる、と言う事が何よりの支えになってくれた。ラグビーでは、自分の身体を相手にタックルさせて、良いポジションにいる味方にパスしてボールを生かし続けようとする。自分の身体を殺してボールを生かす精神が、知らず知らずに、15人の心を一つにし信頼が生まれる。私はラグビーで学んだとおり行動した。チームの全員（この場合は社員）がその意を了として一糸乱れぬ行動をしてくれた事が何より嬉しかった。どこの会社に失業するのを承知で、最後の最後まで全商品を整理して仕入先に返還する困難な作業をやり遂げてくれる人達がいるだろうか。銀行の人達は私が資産を売却して会社整理を決定した後も不安がった。それは社員が赤旗でも振って居座りはしないかと言う事だった。売買の指定の期日までに、三百坪三階建の倉庫と、五階建のビルの内部は完全にガランドウになった。一人ポツンと立ちつくした私には、そこが空襲で焼けただれた廃墟に思えた。私の少年時代の思い出が残る廃墟だった。社員が会費制で残念会を開いてくれた。名ずけて惜別会。彼らの乏しい退職金の中から私の両親に旅行のクーポン券が贈られた。私は彼らの思いやり、やさしさに号泣した。経営者のミスから、職を失い苦労しなければならない連中が、ミスをせめずにやさしく包み込んでくれたのである。私はラガーマンではない彼等からも、ラグビー精神を教えられた。彼等もそれぞれ再就職して元気にやってくれている。私も一年浪人した後、諸先輩のお力添えで、母校早稲田の教員に迎えられ、以前にも増してラグビーに打ち込める環境に恵まれた。有難いことである。これからも、ラグビー精神を踏みはずさずに、人生をフェアプレーで終始できるように頑張るつもりである[33]。

このように述べチームワークの大切さ、チームワークから得たものなどから必要性を痛切に感じられておられる。

戦術・戦略・戦法・作戦から学ぶ

スポーツは、もともと活動それ自体を目的として楽しむ自己目的的活動である。しかし、競技スポーツでは、これらを要素として各々成文化されたルールに基づいて記録の向上を

図ったり、得点を得るために戦う。チームとしてと、個人としての領域とがあるが、それぞれの特性から、身体的能力、技術的能力、戦術、戦法、作戦などを駆使して挑む。チームスポーツでは、自分の役割分担や協同しての責任を果たすこと、また勝敗に対しての正しい態度、満足感など人間として学び取る感性や人間力をも身につける事ができる。

スキー競技のオリンピックで銀メダルを勝ち取った猪谷千春氏が選手生活を終えて十数年後に、ある会社の経営を預かった時、「運動選手だったあなたが全く分野の違うビジネスの世界でしかも経営者になったと言うことで何か戸惑いを感じることはありませんでしたか」とよく聞かれたと言う。しかしスポーツの世界でも、ビジネスの世界でも内容こそ違え、競争の世界であり、したがって私の場合、特に違和感をもつこともなく割りとすんなりビジネスの世界に入れたと言っている[34]。またスポーツの世界で勝つためには、常に新しいテクニックの開発を必要とする。他の選手と同じ事をしていたのでは先輩選手に勝つどころか、同じレベルに追いつくことさえできない。彼らのもっていない新技術を開発し、それをマスターした時にこそ、ライバルを踏み越えて勝利の栄冠をつかむことができるのである。ビジネスも全く同じである。ライバル会社の持っていない新商品、あるいは新販売方法を開発し、成功した時には、相手会社に追いつき、追い越すことができるのである。とも言い、スポーツに於ける試合などと例えている。スポーツにおける試合という状況は多くの要素から構成されており、決して一義的な捉え方はできない。また前もってすべての対策を考慮できるものでもない。したがって選手自身が戦術に関する知識、バリエーションおよび選択肢を十分身につけていない場合や戦術達成能力を備えていない場合には、同じレベルの対戦相手であれば負けてしまうことになる。それゆえ戦術を練ることはコーチだけでなく選手にとっても重要な学習目標となる。選手も戦術上の指示を単にコーチから受動的に受け入れるだけではいけない。自ら積極的に思考を凝らしていくことが大切である。負ければ悔しいおもいをする。今度こそ勝つぞと挑戦意欲を燃やし，何をすれば良いかを考える。そこにも人間力を付ける教材がある。

Ⅰ．戦術とは何か

ラグビーでは、敵に対して仕掛ける攻撃で，たとえばスクラム時のサイド攻撃やラインアウトのピール・オフ，バックス攻撃で使うミスムーヴ，ショートパント等の攻撃を言っており，ディフェンスでのマンツーマンやドリフト等も言う。

・戦術という言葉の由来

ギリシア語に「配置や編成の術」と解される“taktike”（タクティケ）という言葉がある。ドイツ語で戦術を意味する“taktik”（タクティック）という言葉はそのギリシア語の“taktike”に由来するもので一般的に戦術という言葉には全体構想の枠内に計画的に位置付けられた個々の処置も含まれる[35]。

戦術と同様に“戦略（strategie）”という言葉もギリシア語に語源を持ち、「ある全体構想の立案と実行」と解される。狭義には戦争を指揮するための手だてを意味している[36]。ラグビーでは，アップ＆アンダーやドライヴィングモール，ハンドラック，ゆさぶり等を言う。これらの攻撃がしっかり出来ることが勝利への近道でもある。

※軍事に関する戦略論の先駆者として有名なカール・クラウゼビッツはナポレオンの戦争指揮の方法を題材にして戦争と政策の間には特に緊密な連関があることを強調している。戦略と戦術を区別して定義したのはこのクラウゼビッツの「戦争

論」とジョミニの「戦略概論」である[37]。
戦術＝戦場で軍隊や兵器を使っていかに戦うかということ。
戦略＝ある目的を達成するために、いつ、どこで、どんな戦闘を行い、その結果をいかに利用するのかということを定め、その目的に沿うように軍隊の配置・移動・補給等を統制することである[37]。

○スポーツ科学における戦術の定義

スポーツ科学の分野では、戦術とは競技力を構成する要素のひとつであると定義している。相手の行動に合わせて自分の行動を調節することによって試合の目標という観点から常に有利さを得ることができる選手の能力は**“戦術達成能力”**と呼ばれる[38]。

※戦術を用いる場合には以下の2つの基本的な状況が区別される。
・自分の戦術行動を通して相手プレーヤーに対する有利さを獲得する場合（オフェンス・プレーヤーとして）
・自分の戦術行動を通して相手プレーヤーが有利になることを妨げる場合（ディフェンス・プレーヤーとして）

○戦略・戦法・作戦

戦略（strategie）と戦術（taktik）の概念は、古代の「兵学」（「戦争術」あるいは「戦法」とも訳される）に由来するのに対して「作戦」（operation）という語は19世紀後半になってこの2つの中間に位置付けられる概念として用いられるようになったという[39]。参考までに英語では、（戦略＝strategy）（戦術＝tactics）。

戦略がスポーツの領域で取り上げられるようになったのは最近のことである。スポーツ科学の研究対象として取り上げられるのは旧東ドイツで1959年に発表されたシュティーラーの論文からである。次いで1965、1966年に同じく東ドイツのマーローが球技の戦術に関する論文を発表した[40]。

スポーツ全般を網羅した形で「戦略」もしくは「戦術」に関心が向けられるようになるのは1960年代の終わりになってからである。その意味ではスポーツ科学における「一般戦術論」の研究はまだ浅いと言える。したがって種目によって意味が異なったり、人が違えば内容が違うというように概念を定義することはむずかしい状況である。

ドイツ語圏内におけるスポーツ科学の専門書の枠内において「戦略」「戦術」をどう理解しているかということについてロートがまとめたものによると、長期計画的なものは戦略、短期の選択過程は戦術として位置付けている[41]。また、作戦とは自分又は自チームとしての戦い方を言う。この様な戦術・戦法・作戦は対戦相手によって変わることであり、選手は試合の中で相手選手やチームとの関係で判断し遂行していく。ここでも相手との間合いや駆け引きなどの判断能力を養うことが出来る。

○ゲーム理論について

ゲーム理論とは「複数の人間関係において人はどのように意思決定を行うのか」を理論化したもので、現実の社会における人間の行動を予測・解明しようとするときに用いられる[42]。

・ゲーム理論の出発点は数学者　フォン・ノイマンと経済学者モルゲンシュテインの共著で出版された「ゲーム理論と経済行動」からであるとされ、彼らはその中で「単純なゲームの中に人間の意志決定の法則を見出し、それが経済などの社会現象にも応用できる」と説いている。今日ではチェスや将棋、さらには囲碁といった室内ゲームから政治・経済にいたるまでのさまざまな問題を取り扱う基礎科学として発展している[43]。

○ゲーム理論の成立条件

ゲーム理論が成立するためには、プレーヤー、戦略、ルール、勝敗といった要素が必要になってくる。そしてプレーヤーは必ず自分（自チーム）が勝つことを第一に志向し、そのために合理的な判断を下すことが大前提となる[44]。

- プレーヤー……ゲームに参加し、勝利を目的として戦略を立て、行動する者。個人またはチーム。
- 戦略……ゲームにおいてプレーヤーがとりうる行動のこと。現実の制約の中で勝利を求め、勝つための行動と段取り、すなわち戦略が生まれてくる。
- ルール……ゲームのルールだけでなく、自然の法則、社会的条件による制約などのこと。ルールを無視した瞬間にゲームは成立しなくなる。
- 勝敗……ゲーム理論ではプレーヤーがとりうるいくつかの戦略についてその戦略を選択した場合に勝利する度合いを数値で表す[45]。その数値に基づいて評価される。

○戦術に関する助言（経験に基づくもので価値のあるもの）

たとえば

- 相手の足の構えに注意する（格闘技・球技）。
- 相手のリズムを妨害する（リズムをくずす）。
- 常に相手の弱点を攻撃する。（全般的に）
- 自分の右上に向かって突いてきた剣尖は右もしくは上に払い、ただちに背後から側面を突く（フェンシングの場合等）[46]。
- 戦術は，特にチームゲームの形式で行なわれるスポーツ種目で次第にコーチを養成する為の教育内容として取り上げられるようになり、その過程の中でさまざまな流派が生まれる事になる。たとえばサッカーでは、ブラジルスタイル、イングランドスタイル、4-2-4システム、イタリア（カテナチオ）スタイルなどである[47]。
- タイムアウトをとる場合の原則は、続けて3点以上失ったとき、相手が新しい戦術を使ってきたり、自分のチームの戦術を変更しようとするとき、選手の体力が低下した時などである[48]。

選手は，多くの試合経験を積む事によって、それぞれの試合独特の流れがあることを自分自身肌で感じ、先を読む能力を発達させる。そうする事によって日ごろ以上の実力を発揮できるようになってくる。試合には、学ぶ材料が山ほどある事を知っておきたい。

Ⅱ．球技の戦術

バスケットボール，サッカー，ハンドボール，ラグビー，アイスホッケーのような直接相手と対峙してゴールを争うチームゲームの場合には攻撃戦術と防御戦術を考える際には共通の課題の解決が目指される[49]。

攻撃戦術の共通課題

a 防御ラインを破る（ノーマーク）。
b 人数的優位をつくる（オーバーナンバー）。
c 空間的優位をつくる（オープンスペース）。

防御戦術の共通課題

a 防御ラインを破られない。
b 人数的優位をつくらせない。
c 空間的優位をつくらせない。

以上の事などを中心に考えることが大切である。

Ⅲ．コーチの仕事

コーチと言う言葉は、15世紀にハンガリーのコーチェ（KOCS）と言う村で作られた四輪馬車が語源であると言われている。四輪馬車のお客が行き着くところ、目的地にしっかりと方向性を導いてやらなければならないことを意味している。

コーチが戦術トレーニングの枠内で行うことに関して、その展望をまとめれば次のようになる。

① 戦術上の原則や原理（例：パスできる場合だけドリブルする等）を理論と実践の中で伝える。
② 自分のチームに適していると思われる戦術パターン（一連のプレー）をトレーニングさせる。
③ これまでの試合を分析し，図上演習を行う。
④ 複合的に構成されている状況を個別の課題に置き換え，選手たちが戦術の観点に基づいて行為することに敏感になるように仕向ける[50]。

コーチは、教育者としての側面とスポーツの専門家としての側面、そして組織の主催者という事と共にまとめ役としての側面を有することが必要である。

本格的にコーチ業を目指す場合には、トレーニングの科学や、スポーツ医学、スポーツ心理学、スポーツ栄養学、スポーツ人間学、スポーツ社会学など、幅広く勉強し、コーチ資格を取得する必要がある。筆者も日本体育協会や日本ラグビーフットボール協会のコーチ資格と、ニュージーランド留学中に、ニュージランドラグビーユニオンのコーチ資格であるレベルⅠ、レベルⅡの資格を取得した。ここでは、コーチ資格を取得する為の内容については触れないが、戦術・戦法などとの関係においてコーチ活動について簡単に触れておくことにしたい。

コーチの活動にとって重要なことは、正しい方法や処方を通して自分の指示や情報を選手たちに伝えるということである。コーチの活動に関する調査によると若いコーチほど選手が処理できないほどたくさんの情報を詰め込もうとする傾向がある。

試合が近づくと選手が受容できる情報は限られてくるので最も重要な事柄に焦点をしぼって、そこに注意を向けさせるように考慮すべきである[51]。集中力，持続力，我慢，判断力、周辺視能力などとともに技術的なことの指導も教材として事欠かない。コーチングは、選手やチームをサポートするシステムであり，長年の経験と勉強が必要である。教わりながら自分自身を発達させていく事が重要である。

筆者自身多くのコーチに教わったが特に印象に残っていることを二つ挙げておきたい。一つは、「動」と「働」と言う言葉からで、選手が試合において「動く」のは当たり前のことである。しかし、動いているだけではエネルギーの消費である。動いてしっかりと勝つための仕事をしなければならない。イ偏をつけると「働く」になる。働くと報酬がもらえる。スポーツ競技における報酬は勝利である。試合の中でしっかり仕事をしろという事であり、勝つと言う喜び、報酬が欲しければ動だけでなく、イ偏をつけることであると良く言われた。二つ目は、「九十九をもってものの半ばとする」。という事で最後の最後まで戦い抜くことの必要性を教えられたが、まさにそのとおりであり、試合終了間際の逆転劇を何回となくこの目で見て来た。私の印象に残る最近の試合では、第82回全国高等学校選手権大会の一回戦で本郷高校が江の川高校をロスタイムでみごとに逆転したもので、終了間際の江の川高校の逆転をはねかえし再逆転したものであった。江の川高校が本郷高校に逆転した時の本郷高校の大浦監督の顔と本郷高校が再逆転した時の顔の違いがあまりにも印象的であった。涙を浮かべて喜ぶ大浦監督には何か思いがあったのであろう。両チーム共によく戦ったいいゲームであったが、まさに「九十九はものの半ばである」ことを証明したものであった。このようにいろいろな格言などもコーチングには有効である。また「セルフコーチング」と言って自分で自分をコーチングすることも大切である。理想的な人間力はもともと生まれつき持っているのも

のではない。周囲の人達から尊敬されている人はそれだけ努力をしてきた結果なのである。自分からやる気になって尚一層の上昇を目指してがんばり，コーチ役を自分自身が行い可能性を開いていくことである。コーチングについては、多くの書物が出ており考え方も多種多様なのでここでは省略するが、コーチから学び取る事が山ほどあることも忘れてはならない大事なことである。

テクニカル活動から学ぶ

スポーツ界を問わず、ビジネスの世界でも、政治の世界でも、様々な分野で「戦略」という言葉が頻繁に使われている。ラグビー日本代表の前監督であった平尾誠二氏は、「戦略」が必要となって来たのは、自然体では戦えないからであると言い、戦略とは、目標達成の為のシナリオであり、シナリオ構築の為に最も必要なものが情報だと言っている。特に高度化かつ複雑化したトップレベルの争いで勝利を手にする為には、手深り的、あるいは対処療法的とも形容されるようなやり方では偶然を期待するに等しく今や高度な情報戦略活動は不可欠なものであるという認識が定着化しつつある[52]。また、単に相手の状況を把握するだけでなく、情報をより多角的・総合的に分析し、相手の戦術・戦法・作戦などを知ることで、予測し試合に臨むことが求められる。

スポーツにおいて、強化するための活動をあげると、普及・育成・発掘・伝達・追跡・選考・強化・分析・開発・企画・評価・記録等を上げることができる[53]。これらの項目をしっかり行わなければ勝利を手にすることはむずかしい時代に来ている。

○テクニカル・スタッフの仕事と役割

最も大きな仕事は「分析」である。分析は大きく「客観的分析」と「主観的分析」に大別できる。また、細分化すると、競技種目分析、環境・用具分析、一般分析（ゲーム様相や動向）、ルール・レフリング分析、デジタル情報分析・加工（ITテクノロジーの活用）、セレクション分析（選手選考）、情報・展望分析（世界の流れと未来の予測）、自チーム分析（問題や課題の抽出）、比較分析（自チームと対戦相手チームの分析）、スカウティング分析（対戦相手の情報収集）。などである[54]。これらの仕事を経験したり、勉強することは人間社会の中で生き抜くため、競争社会を勝ち抜くために大変重要なことである。また、試合に勝つためには、特に、テクニカル・スタッフからの情報が大切で在り、どちらのチームがどれだけ多くの情報を得ているかが鍵になる。その意味からも、・「テクニカルの役割はフィールド外の勝負に勝つことである」[55]といえる。

リーダーシップから学ぶ

リーダーシップとは、生まれつき決定されている能力ではなく、学習する事によって後天的に身につけることができるものである。すなわち素質ではなく、努力と意志によって誰でもが体得する事ができるスキルである。またリーダーシップは、万人に必要な「人間力」と言う事ができる。

リーダーの研究で有名な飯塚昭男氏は、「リーダーの研究partⅡ」（㈱ウェッジ）で、人を心底から感動させるのは人間的魅力だと言っている。また「リーダーの条件とは何か」と言う事では、

第一は、リーダーシップ。
第二は、情報感覚。
第三は、人間的魅力。

だと言い、過不足なく3つがブレンドされ調和されていると一番よいと言っている[56]。また、人を引き付ける魅力、つまり人間的魅力とは何かを、人物評論の第一人者であった故伊藤　肇氏は、「指導者が人を心底から感動させるのは、立派なイデオロギーや論理では

表2　人間的魅力19か条

（筆者作成加筆）

長所		短所	
・強くてたくましい人	・先見力のある人	・威張る奴	・ケチな奴
・教養のある人	・情けのある人	・冷たい奴	・暗い奴
・優しい人	・包容力のある人	・包容力のない奴	・狷介な奴
・清潔な人	・美しい人	・自己中心的な奴	・形式的な奴
・ひらめきのある人	・説得力のある人	・情けのない奴	・思い込みの激しい奴
・行動力のある人	・発想が豊かな人	・グチっぽい奴	・意志の弱い奴
・意志の強い人	・責任感のある人	・責任感のない奴	・考えの浅い奴
・考えが深い人	・自己規制の強い人	・不潔な奴	
・ケチでない人	・決断力に富む人		

なく、人間的魅力だ」と言っている。

人間的魅力を、人物評価で厳しい伝記作家である小島直記氏が「スキな人，キライな奴」を新潮文庫で、こうした表題で人間を区分けするとと言うことで飯塚氏が列挙すると次のようになる[57]。

上記のうち短所を2つも3つももった人間は、どうしても好きになれず、人間的魅力に欠けていると断じてよいと言っている。また長所が短所を大きく上回っていることが大切とも言う。作家の城山三郎氏は、魅力を感じさせるリーダーに必要なものとして

① 常に生き生きしていること。
② いつも在るべき姿を求めていること。
③ 人間卑しくないこと（下品）。

をあげ、心得として強調したいのは「ひたすら自分を磨く」ひたすら自分を磨いて己の魅力を高めることは、人生を豊かに生き抜くためにも必要であり、魅力のある人には、よく人が集まり、交友を通じての楽しみも倍加する[58]。と言っている。

ある社会学者が、指導者がリーダーシップをいかんなく発揮する条件として、次の3つをあげている。

① 自分の仕事に強い情熱を持っている。
② 課せられた任務について責任感を持ち続ける。
③ 客観的な目で仕事の推移や人間を観察する。

どの条件も、これが出来ると言う能力ではなく、こうあろうとする「意志」であることに注目してほしい[59]。つまりすべて努力次第で養うことが出来るものである。

○リーダーシップのスタイル

リーダーシップのスタイルは、つぎのようなものをあげることが出来る。

① 指示命令型スタイル……「言われた通りにやれ」、メンバーに即座の服従を求める。
効果＝短期的に「目標感」を強化
② ビジョン型スタイル……俺の考えについて来い」断定的だが公正・的確な長期的ビジョンを示す。
効果＝中長期的に「方向感」を強化
③ 世話役型スタイル……「仲良くやろう」メンバー間の「和」を重視する。
効果＝情緒的な「一体感」を向上
④ 集団運営型スタイル……「みんなはどう思う」部下のコミットメントを大切にする。
効果＝「一体感」「責任感」を強化
⑤ 規範型スタイル……「私のするとおりにしろ」規範を示し、部下に自己管理を要求する。
効果＝「目標感」の向上
⑥ 育成型スタイル……「こうしてみたらどう」長期的な視点から部下を育成する。

効果＝「一体感」「責任感」を向上

これらのうち、どれか一つにこだわるのではなく、いくつか複数のスタイルを状況によって使い分けることである。また部下や部員に対しての目配りも大切だが、自分の意図や方針等を態度や言動でなにげなく「みせる」ことも必要である[60]。また、リーダーの機能と役割として、目標達成機能と集団維持機能があげられる。目標達成機能は，問題点を明確にし、専門的情報を入手可能にし，仕事のでき具合を評価し、集団や組織体の生産性の向上を遂行する働きである。集団維持機能は、少数意見保持者にも発言の機会を与え、集団内の対人関係を好ましいものにし、成員を維持し、集団それ自体を維持する働きである。以上のようにリーダーシップは、チームスポーツでは特に重要なことである。ラグビーと言うスポーツは、一番多くのプレーヤーによって行われる。その為に個人プレーとユニットプレーそしてチームプレーの大切さが要求される。そこでは自ずとリーダーシップが必要となり、活動していく中で自然に身についてくるものである。また、筆者は、むしろフォローアーシップの方が、もっと大切なことであるとも思っている。たとえばラグビーでは、多人数でプレーをする競技であり、ボールを持っている選手は一人で、他の多くの選手はフォロー（サポート）するプレーヤーである。この選手たちの動き（働きかけ、リード、気持ち等）が大変重要となってプレーが継続されていく。うまく継続をしボールをキープしている時間の長いチームほど勝利が近いと言われている。いかにしっかり最後までサポートしてやるかが大切である。最近、人に物事をたのんでおいて、結果がどうなったのか連絡をとらないで平然としている人が増えてきた。これも、最後まできちんとサポートをすることの大切さを忘れている結果であり、人間力の不足から来ていることでもある。スポーツによる人間形成が叫ばれているが、中村敏雄氏は、スポーツに人間形成機能があるのは周知のことであり、そうである以上、「する」人や「みる」人をより人間的な人格の持ち主に形成していくという内容や方向性をもっているのかということを問うべきであるし、そのような内容や方向性をもつスポーツ指導に「少しずつ」変えていくことが、今日のわれわれにできる文化の継承と発展のための営みであるといえる。と言ってスポーツを、より人間的な文化へと発展させることの大切さを説いている。最後になったが、大西鉄之祐氏が著書「闘争の倫理」～スポーツの本源を問う～（中央公論新社）　の中でラグビーをする心を次のように表している。ラガーマンにとって大変重要なことであるのでここに紹介しておきたい。

1. 努力することを楽しむ心
   ラグビーを行う楽しさは、毎日毎日の練習にベストを尽くして努力し、その努力を楽しむことにある。努力することを楽しむ心こそ、人間の行うあらゆる行動を楽しくしてくれる。
2. 知性的行動を楽しむ心
   ラグビーは衝動的運動ではない。ラグビーの技術には必ず理論がある。技術の練習の中にその理論を注入して指導することで、ラグビーは知性的な行動であることを把握させることができる。ラグビーが知性的行動の原初的なものを持っているが故に楽しみが倍加されるのである。
3. フェアプレーを楽しむ心
   ラグビーはゲームであり闘争である。悪いきたないプレーもできるし、フェアなプレーもできる。勝ちたいためにきたないプレーをする人がいる。しかし決して楽しいゲームはできない。そ

こにフェアなプレーを行うための闘争の倫理ができあがる。どんなときでも自分の闘争の倫理に従ってプレーできる人は最高のスポーツマンである。フェアプレーを楽しむ心こそスポーツの最高のものである。

4. クラブ生活を楽しむ心
スポーツクラブにおいて育成されたフェアプレーを中心とした、良き社会をつくりあげるための行動と態度を実社会において実行し得るスポーツマンは最高のラガーマンである。こうなった時スポーツは社会に大きく貢献したということができる。
5. 敵を愛し尊敬する心[61]。

おわりに

ラグビーと言うスポーツを通して、スポーツから学び取る事のできる様々な事柄について述べてきたが、特に競技スポーツに於いて競技力を高めるために必要とされている体力的要因、技術的要因、精神的要因、知的要因などを克服することによって得られるさまざまな力は実に大きいものがある。また，自分の競技能力やチームの競技能力を高めるために工夫をこらして練習を重ねひたむきに努力する。そんな中にある数々の人間力を身つける要素，これも計り知れないものがある。ここでは、具体的に練習方法から学ぶことの出来る事柄については触れなかったが、練習方法には、それぞれのスポーツ種目において理にかなったかなりの工夫が凝らされている。根性論も必ずしも否定できない。時と場合によってはそれなりに必要な事もある。このようにスポーツには、人間にとって必要な力を培うことのできる要素が多分に含まれていることを忘れてはならない。スポーツ活動を行う中や試合や練習方法の中から学ぶ知識や知恵が山積にある事を考えると、人間生活からスポーツ活動を切り離すことはできない。なんとしても子供たちにスポーツに取り組みやすい環境を作ってやらなければならない。本題を手がけるきっかけは、余りにも理不尽な出来事がスポーツ選手やスポーツを取り巻く世界で多発していることや、不可解な子供を取り巻く事件が続発していること、また、いじめによる自殺が連続して起きている事などからであり、なんとかしてそれらを未然に防ぐことが出来ないかとの想いからである。今、情緒的な行動の訓練をする場は、スポーツの中にしかないと思われる。また、人間が生死のコントロールをどうやっていくかを訓練する場もスポーツにしかないであろう。スポーツには、それらの問題を克服し未然に防ぐ事の出来る要素が山ほどある。スポーツを取り巻く環境の整備とスポーツ活動への動機づけ、そして正しい指導が急務である。ただスポーツ活動をしたと言うだけでは意味がない。それらによって培うことの出来る知識・知恵を人生に生かせる人間力（生きる力）として持ってこそスポーツ活動を行う本当の意味がある。そしてはじめて、スポーツマン・ラガーマンであると声を大にして言えるのではないだろうか。「スポーツ精神」「ラグビー精神」の構造改革が急がれる。

【引用文献】

1) 野ノ村　博　月刊ラガー　創刊号　1983　pp101～102
2) 同　上　pp102～103
3) エリク・ダニング、ケネス・シャドル共著　大西鉄之祐、大沼賢治共訳　ラグビーとイギリス人　1983　p23
4) 日本ラグビーフットボール協会　ミニラグビー　1988　p1
5) 高村　薫　読売新聞　朝刊　2006，6、28
6) 佐々木光朗　「いい子の非行」　春風社　2000　pp210～240
7) ダニエル・ゴールマン　土屋京子訳　EQ～こころの知能指数　1996　pp59～77
8) マイケル・ポランニー　「暗黙知の次元」　ちくま学芸文庫　2003　p18
9) レイチェル・カーソン　「センス・オブ・ワン

ダー」 佑学社　1992　pp21～26
10）池田　潔　自由と規律　岩波新書　2000　p115
11）ベースボールマガジン別冊　薫風号　第10巻第1号　ベースボールマガジン社　1989　pp4～6
12）日本ラグビーフットボール協会　平成18年度競技規則2006～2007　2006　pp1～12
13）広瀬一郎　スポーツマンシップを考える　ベースボールマガジン社　2002　p22
14）大橋昭一、竹林浩志編著　現代のチーム制　同文館出版　2003　p（3）
15）同　上　p8
16）同　上　p8
17）同　上　p9
18）同　上　p9
19）同　上　p9
20）同　上　p48
21）同　上　p49
22）同　上　p51
23）同　上　p52
24）同　上　pp52～53
25）同　上　p55
26）同　上　p57
27）山本　浩　フットボールの文化史　ちくま新書　1998　pp183～184
28）大橋昭一、竹林浩志編著　現代のチーム制　同文館出版　2003　p61
29）同　上　pp62～63
30）同　上　p62
31）同　上　p64
32）同　上　p65
33）日比野弘　「人間の生きざまを学ぶ」「体育科教育」（大修館書店）　1982　p11
34）猪谷千春　「スポーツと学問の両立」「体育科教育」（大修館書店）　1982　p10
35）ヤーン・ケルン　朝岡正雄、水上　一，中川昭監訳　スポーツの戦術入門　大修館書店　1999　p14
36）同　上　p15
37）同　上　p15
38）同　上　pp16～17
39）同　上　p20
40）同　上　p20
41）同　上　pp21～22
42）同　上　p24
43）同　上　pp24～25
44）同　上　p25
45）同　上　p25
46）同　上　p33
47）同　上　p33
48）同　上　pp35～36
49）同　上　pp39～40
50）同　上　p141
51）同　上　p141
52）河野一郎監修、勝田　隆　知的コーチングのすすめ　大修館書店　2004　p141
53）同　上　p135
54）同　上　p139　図5－10より筆者文章化
55）同　上　p152
56）飯塚昭男　リーダーの研究Part3　ウェッジ　2003. 3, pp68～70
57）同　上
58）飯塚昭男　リーダーの研究Part2　ウェッジ　2002, pp214～219
59）渡辺俊一、三宅充祝共著　リーダーシップを鍛えるトレーニングブック　かんき出版　2002　p18
60）同　上　pp74～75
61）大西鉄之祐　闘争の倫理　中央公論新社　1999　pp85～86

以上

【参考文献】

1）中村敏雄　スポーツの風土　大修館書店　1981
2）エリク・ダニング、ケネス・シャド共著　大西鉄之祐、大沼賢治共訳　ラグビーとイギリス人　ベースボールマガジン社　1983
3）㈶日本ラグビーフットボール協会　Mini Rugby　～ミニ・ラグビーを楽しもう～　1988
4）㈶日本ラグビーフットボール協会　EVEN BETTER RUGBY　1988
5）中村敏雄　メンバーチェンジの思想　平凡社　1989
6）同　上　スポーツルールの社会学　朝日選書　1991
7）稲垣正浩　スポーツを読む　三省堂選書　1993
8）中村敏雄　オフサイドはなぜ反則か　三省堂選書　1995
9）同　上　スポーツルール学への序章　三省堂選書　1995
10）ダニエル・ゴールマン　土屋京子訳　EQ　こころの知能指数　講談社　1996
11）レイチェル・カーソン　センス・オブ・ワンダー　新潮社　1996
12）山本　浩　フットボールの文化史　ちくま新書　1998
13）大西鉄之祐　闘争の倫理　中央公論新社　1999
14）ライリ・ベル、マーク・ローリー　溝畑寛治他訳　晃洋書房　1999
15）藤島　大　ラグビーの世紀　洋泉社　2000
16）池田　潔　自由と規律　岩波新書　2000
17）曇岩奈々　感じない子ども　こころを扱えない大人　集英社新書　2001
18）藤島　大　知と熱　文芸春秋　2001
19）広瀬一郎　スポーツマンシップを考える　ベー

スボールマガジン社 2002
20) 菅原裕子 コーチングの技術 講談社現代新書 2003
21) 小林深緑朗 世界ラグビー基礎知識 ベースボールマガジン社 2003
22) 重松 清 スポーツを「読む」 集英社新書 2004
23) 日本ラグビーフットボール協会 競技規則（平成18年度）2006

以上